

はじめに

2019年末に中国武漢で発生した新型コロナウイルス感染症は、翌年には全世界におけるパンデミックとなり、依然として人類社会に甚大な影響を与え続けている。経済構造、生活様式を含む社会環境の変化は不可逆であり、今後、人々の価値観の転換をもたらすことは間違いない。しかし、脅威は感染症にとどまらない。過剰な人間活動による地球温暖化に端を発する気候変動に基づく巨大な自然災害の頻発や、生物多様性の喪失、また天然資源の枯渇など人類は自らの生存基盤を揺るがす困難に直面している。世界は叡智を結集してこれらの諸脅威に立ち向かうが、とりわけ科学技術には大きな貢献が期待される。そのため今回の新型コロナウイルス感染症の危機を、むしろさらなる発展の機会と捉えるべきである。

鍵は「Beyond Borders」である。近年、研究が先端技術の獲得により精密化、高度化する一方で、分野は細分化の一途を辿る。自然科学は本来、あらゆる空間的、時間的制約を超えて森羅万象を対象とするため既成の「学境」を越え、「国境」を越えて多様な出会い、多国間連携を促すことが必要である。かつて科学は少数の独創的な研究者により先導されてきたが、個人の能力には自ずと限界がある。ビッグデータや人工知能などの先端技術を駆使はするものの科学はやはり人の営みであり、「個人がどれだけ賢いかではなく、どのくらい多くの人と接触するかが重要」(マーク・トーマス)とされる時代である。研究課題によっては競争が避けられないが、効果的な協調による成果の最大化が求められている。

JST研究開発戦略センター(CRDS)は2018年にBeyond Disciplinesを上梓し、続けてThe Beyond Disciplines Collectionを公表して、科学技術分野の融合、加えて自然科学、人文学、社会科学の関係者から一般市民をも含む連携の必要性を強調してきた。なぜなら、もともと科学技術が解決すべき社会課題は人々の価値観に基づくが、逆に社会環境の変化が人々の価値観の変化を促すからである。社会の負託に応えるには、さまざまな専門研究者、科学技術コミュニティのみならず多様なステークホルダーの参画を得て取り組むことが重要である。さらに政策実現のためには合理的な目標管理の枠組とともに、個人、組織が共通目標に向かい意欲を持ち自律的に参画する機能的エコシステムが不可欠である。

CRDSは現代文明社会の変化の大きなうねりを直視しつつも、未来の持続的発展の観点を踏まえて、科学技術が目指すべき方向と発展の可能性を俯瞰的視野で捉えるべく努力を続けている。本報告書がいわゆるwithコロナ、postコロナの時代の科学技術振興の一助となれば幸いである。読者諸氏のご意見、提言を歓迎する次第である。

国立研究開発法人科学技術振興機構
研究開発戦略センター センター長

野 依 良 浩